

特別活動の潜在的機能

—社会関係資本・主観的意義・生徒界秩序—

山本宏樹*

Latent Functions of Special Activities in School Education

—Social Capital, Subjective Relevance, Order of Student Field—

YAMAMOTO Hiroki*

Abstract

In School education, special activities are very important, because there are three latent functions. 1) Special activities satisfy subjective relevance of students. 2) Special activities build social capital. 3) Special activities reconstruct social order of student field by collective effervescence or other social mechanisms.

キーワード：特別活動、社会関係資本、スクールカースト、主観的レリバンズ、集合的沸騰

Keywords：Special Activities, Social Capital, School Caste, Subjective Relevance, Collective Effervescence

1. 学校における特別活動の現状

学校の多忙化が止まらない。週5日制の実施や2000年代以降の「脱ゆとり」型改革による総授業時数の増加等のなかで、今回の学習指導要領改訂後の小学校の1週間あたりの授業時数は小学2年生で26(5.2/日)、小学4年生および6年生で29(5.8/日)となった。これは1886年から現在に至るまでの小学校史上で最高値である(池田・大森 2017)。中学校の場合は、すでに平成20年度の新学習指導要領改訂時に、週あたり授業時数が各学年で1時間ずつ増加されたことで、全学年で1週間の授業時数は29(5.8/日)となっており、今回の改訂では現状維持となった。

週あたり授業時数が29というのは、週4で6時間授業、残り1日が5時間授業という計算である

から、時間割はほとんど飽和状態に達しているといつてよい。さらには、学力向上のために年間標準総授業時間数を超えて教科授業を行う学校もあり、授業日数確保のために夏休み期間を短縮する自治体も現れている(毎日新聞 2017年8月24日付朝刊)。

近年、学校の労働条件の過酷さ(国立教育政策所[編] 2014)や、教師を長時間にわたって拘束する「ブラック部活動」(内田 2017)の問題が注目を集めているが、多忙な状況にあるのは児童生徒も変わらないのである。

そうしたなかで、授業時間数を捻出するために削減の対象になっているのが特別活動とりわけ学校行事である。2010年にベネッセが全国の校長に対して行った調査によれば、多忙化のなかで「学校行事の精選を進める」(小88.9%、中80.6%)、「始業式などの学校行事のある日にも授業を行う」(小

*理工学部共通教育群助教 Assistant Professor, Division of Liberal Arts, Natural, Social and Health Sciences, School of Science and Engineering

73.4%、中 66.3%) といった対応が進められている (ベネッセ教育研究開発センター [編] 2011:207)。

文部科学省の調査をもとに、平成 14 年度から平成 27 年度のあいだに、生徒会活動と学校行事の授業時間数がどの程度変動しているかを見たのが下図である。図 1 は生徒会活動、図 2 は学校行事について小 5 と中 1 の授業時間数の分布を比較している¹⁾。

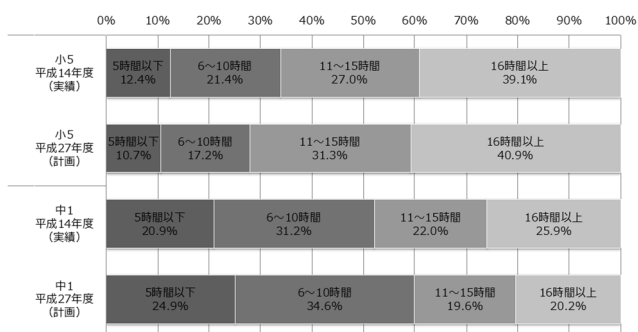


図 1 生徒会活動の年間授業時数の変化²⁾

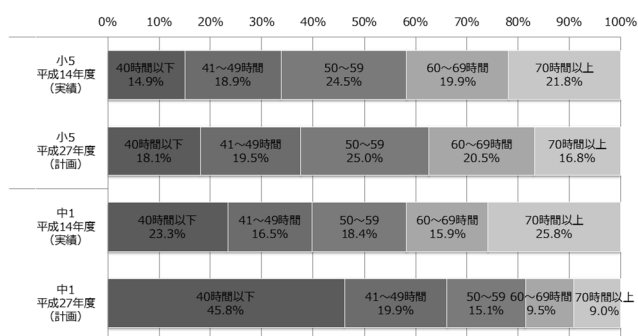


図 2 学校行事の年間授業時数の変化

図 1 の生徒会活動については、小 5 では年間 10 時間未満の学校の割合が 33.8%から 27.9%へと減少している一方、中 1 では 10 時間未満の学校が 52.1%から 59.5%へと増加しているなど一貫した傾向は見られない。その一方で、学校行事については年間 49 時間未満の学校が小 5 では 33.8%から 37.6%まで増加、中 1 に至っては 39.8%から 65.7%まで大幅に増加していることが分かる。

前述の文部科学省調査によれば、平成 6 年度の学校行事の平均授業時間数は小 5 で平均 70.8 時間、中 1 では 83.1 時間であったという。調査では平成 27 年度の平均時間数が算出されていないため直接的な比較は困難であるが、学校行事の年間授業時間数が 70 時間以上の学校は、現在では 2 割未満と

なっており、やはりこの 20 年のあいだに学校行事の授業時数の削減が相当程度進んでいるものと思われる³⁾。

学校行事が授業時数の削減対象になりやすい理由としては、特別活動の 3 領域 (学級活動・学校行事・生徒会活動)のうち、学校教育法施行規則にて、学級活動には年間 35 時間 (小学 1 年生のみ 34 時間) の標準時間が設定されているのに対し、学校行事や生徒会活動にはそれが設定されていない点、また生徒会活動については、図 1 に見られるとおり、学校行事に比べて総授業時数が少なく削減の余地があまり残されていない点が考えられる。

しかし、学校行事などの特別活動の授業時間数の削減が子どもや社会に対していかなる影響を果たすのかについては学術的な検討がなされていない。本稿では、以降において特別活動とりわけ学校行事が果たしている機能のうち、主要な目標とされる「集団活動を通じた『生きる力』の育成」⁴⁾から距離があるという意味で「潜在的」な機能について試論的に検討を行うこととしたい。

2. 特別活動の3つの潜在的機能

(1) 児童生徒の主観的意義の充足

特別活動が果たしている潜在的機能として第一に挙げられるのは「児童生徒の主観的意義の充足」^{レリバンス}である。

これについて、中村豊が教育学部に所属する 1 年生 108 名に対して「学校生活で一番思い出に残っているよかったこと」を尋ねた調査があるが、その結果が興味深い。

表 1 学校種別「よい思い出」

記述内容	小学校 (人)・(%)		中学校 (人)・(%)		高等学校 (人)・(%)		
学校・学級生活	10	9.3	8	7.4	8	7.4	
休み時間・放課後	13	12.0	2	1.9	2	1.9	
授業 (特別活動を除く)	8	7.4	0	0.0	3	2.8	
特別活動	学校行事	54	50.0	51	47.2	44	40.7
	「儀式的行事」	0	0.0	5	4.6	1	0.9
	「学芸的行事」	4	3.7	11	10.2	18	16.7
	「健康安全・体育的行事」	20	18.5	10	9.3	9	8.3
	「遠足・集団宿泊的行事」	27	25.0	21	19.4	16	14.8
「勤労生産・奉仕的行事」	3	2.8	4	3.7	0	0.0	
部活動 (小学校はスポーツクラブ)	8	7.4	35	32.4	42	38.9	
その他	8	7.4	9	8.3	9	8.3	
無記入	7	6.5	3	2.8	0	0.0	
合計	108	100	108	100	108	100	

(佐々木・中村 2014:18)

結果は、表1に示されているとおり、小・中・高のすべての学校段階において「学校行事」が1位であり（小50.0%、中47.2%、高40.7%）、2位が小学校は「休み時間・放課後」（12.0%）、中・高は「部活動」（中32.4%、高38.9%）となったのである（佐々木・中村2014:18）。

中村は調査で「学校行事」が「一番よい思い出」である理由についても尋ねているが、学生が挙げた理由の代表例は「活動自体の楽しさ」「満足感」「成功体験」「達成感」「居場所の獲得」「人間関係の深まり」「集団の絆の強まり」「所属感・一体感」などであったという。

中村の調査において「学校行事」は複数のカテゴリの総計であるため、他の活動との単純な比較は困難であり、特別活動のその他の領域である生徒会活動や学級活動も選択肢には含まれていないように見える。だが、少なくとも学校行事が卒業生の脳裏に好ましい学校体験として刻まれやすいものであることはまず間違いないだろう。

実際、筆者も授業で学生に対して中学校時代の学校の思い出について尋ねることがあるが、道徳の授業を受けた記憶が往々にして失われている一方、文化祭、体育祭、修学旅行、卒業式などの思い出話に花が咲くことはやはり多い。

おそらく、その主たる理由は人間の脳の機能に由来する。人間の長期記憶は手続記憶、意味記憶、エピソード記憶の三種に大別できる。手続記憶は自転車の乗り方や鉄棒の逆上がりの仕方のように一度体得すると忘却しにくい身体的記憶であり、意味記憶は英単語や数学の定理のように特定の時間や場所を離れた形に抽象化され一般化された情報の記憶である。それに対して、学校行事は具体的な出来事の内容、時間、場所、感情などがひとまとまりとなったエピソード記憶として脳裏に刻まれる場合が多い。そのため学校時代の具体的な思い出について脳内を検索した際に再生されやすいのである。

エピソード記憶のなかでも特に鮮明かつ精緻に記憶されたものを閃光記憶と呼ぶことがある。事件や事故、幸福な体験など、強烈な感情をともなったイベントは脳に強く刻印され、事後的に鮮明に思い返すことが可能となる。

教科の授業は同じ形式の繰り返しになりがちで

あり、よほど感銘的であったり、授業中に事件が起こったりしなければ記憶に残りにくい。それに対して学校行事は、体育祭や修学旅行、卒業式など感動的なシチュエーションを含む場合が多く、それが上記の調査結果にも表れているのだろう⁵⁾。

もちろん、エピソード記憶として脳裏に刻印されることと、実質的な能力形成に寄与することは別の話である。だが、学校行事が少なくとも本田由紀（2005）のいう「教育の主観的意義」の提供に深く寄与していることは間違いないといえよう。

学校教育の存在意義が鋭く問い返される現代において、学力向上の要請のもとにそうした生徒の主観的意義の源泉を手放すことが、いかなる影響を果たすのかについては、実際のところ不明な点も多い。

認知的整合性に関する多くの心理学実験が明らかにしているとおおり、人間は無意味な行為を強制された場合、自己有能感の剥奪や実存的不安の惹起を避けるために、強制された無意味さの中になんとか人生にとっての意義や自己決定の契機を見出そうとする心理的傾向を有する。

そのため仮に学校行事や生徒会活動を極限まで切り詰めた場合に、児童生徒の側がそれまで意義を感じずにいた教科学習等に主観的意義を見出し始めるといった可能性もまったくないわけではない。敢えて言えば、受験学力至上主義者が言うように「学校行事に現を抜かす」ことを禁じることで、その他が活性化するという可能性もまったくないとは言いきれないのである。だが、現実的に考えれば、娯楽のない全制施設に児童生徒を幽閉するのでもないかぎり、学校外の娯楽に主観的意義を求めて「学びからの逃走」や不登校が引き起こされる可能性のほうが高いのではないかと⁶⁾。

（2）社会関係資本への投資

学校行事や生徒会選挙を介して複数の人間が閃光記憶のような形で集合的記憶を共有したり、その準備等のために学級で力をあわせたり、あるいは学級活動の内部において議決や席替えやレクなどの小規模な祭儀を執り行ったりといった特別活動の経験には、もう一つの重要な機能が潜在している。すなわち社会関係資本の形成機能である。

ここでいう社会関係資本は、フランスの社会学者

P・ブルデューの提唱した人的コネクションに関する概念である⁷⁾。社会関係資本は、知識・技能などの文化資本、金銭・所有物などの経済資本とともに、個人の社会的地位達成を左右する。

社会関係資本を理解するにあたっては、たとえば芸能人や政治家と知り合いであることの持つ社会的効果を考えてみるのがよいだろう。往々にして、そうした知人を有する者は、当人の学歴・知識や財力にかかわらず一目置かれることになる。

有名人でなくても、基本的に友人が多ければ、知識を得たり、金銭を調達したり、あるいは幸福感や承認欲求を満たすのに役立つ。学級においても学業面で優秀な級友と友人であれば勉強を教えてもらえるし、卒業後に裕福な家庭に生まれた級友に仕事を紹介してもらえる場合もある。時には同級生同士が結婚する場合もあるが、これも学校における社会関係資本形成の結果のひとつに数えられるだろう。

心理学的観点からいえば、経験が苦難に彩られたものであればあるほど、記憶を共有する者同士の関係性は強まる。かれらは困難を共に体験し、共に乗り越えるという経験を通じて、そうでなければ到達し得ない強い心理的紐帯を形成するのである。これは社会心理学でいうところの「吊り橋効果」によって説明できる。不安定な吊り橋の上、あるいは戦場のように、危機的な状況であればあるほど、協力的な他者の存在が燦然と輝く。特別活動は、生徒に適度な心理的負荷をかけることによって、親友関係を創出する場合があるのである⁸⁾。

公教育の目的は、子どもを「一人前の大人」にするための諸々の知識・技能などの文化資本、正統的な振る舞いや倫理観（の集合体であるハビトゥス）の形成支援であるとみなされる場合が多く、実際、学習指導要領における特別活動の目標もまた「資質・能力の形成」を主眼に置いているように読める。だが社会関係資本の形成には独自の重要性が存在する点を強調しておきたい。

たとえば学歴資本の蓄積競争で不利を抱える低学力層や、学校文化と適合しにくいマイノリティ文化を生きる子どもたちにとっては、社会関係資本への投資が将来的な生活基盤形成のための、文化資本投資に代わる戦略として機能する場合がある（山田ほか 2017）。

何が社会関係資本としての価値を持つかは、どのような場（界）を生きるかによって異なる。学校で得られる生徒間の絆は、学校卒業後に地元を離れて大学に進学したり就職したりする者にとってはさほど重要ではないかもしれない。だが地元に残って地域共同体を生きる者たちにとっては、それが一生の財産になる場合もある（たとえば山本 2013）。

学校で培われた集合的記憶は、集团的アイデンティティの形成をうながす機能を果たし、社会関係資本の形成と維持に対して寄与する。たとえば、同窓会では何年間も疎遠であった同級生が、過去のエピソードを酒の肴にして旧交を温めるといったことが頻繁に観察される。子ども時代は別の校友グループに属していた同級生同士が、成人式や同窓会で再会し、集合的記憶を頼りに新たな友好関係を芽吹かせることもある。日本の場合は特に、中学卒業後に進路が階層分化して同級生同士が疎遠となる場合が多いが、学校行事等によって培われた集合的記憶は「高卒者／大卒者」「地元民／都市への転出者」などの属性的分断を超える紐帯として機能する可能性を有するのである。

また、そもそも運動会のような学校行事は、吉見俊哉（1999）が指摘するとおり、明治国家のイデオロギー装置としての役割を期待されつつも、学校制度の受容過程において、地域共同体の伝統的祭礼を学校教育内部に取り込む形で育まれてきた側面を有するのであって、現代においても運動会や学園祭に対する地域住民の参加や、職場体験や収穫祭、地域清掃を通じた子どもたちの地域共同体への参加は、痩せ衰えた地域共同体の維持・形成のために潜在的な効果を果たしている可能性がある（たとえば清水・堀・松田 2013）。

（3）生徒界の秩序の再構築

上記のように主張した場合、児童生徒の主観的意義の充足や社会関係資本形成は、学校における日々のインフォーマルなコミュニケーションや部活動によって可能であるから、特別活動という形で学校教育が組織的に関与する必要はないとの異論が出されるかもしれない。だが、塾や予備校、大学などのような教科学習中心の教育課程では到達することの困難な要素が特別活動には含まれている点に

注意したい。

たとえば、正規の学校教育課程において生徒に感涙が見られる場面というのは、往々にして特別活動である。児童生徒は卒業式や三送会⁹⁾等で感極まって普段絶対に言わない類いの感謝の言葉を口にすることがあるし、体育祭では優勝が決まった瞬間にチームメイト同士が抱き合って喜んだり、逆に負けたチームの主将が涙ながらに述べる反省の弁に後輩も感化されて涙ぐんだりする。感涙ではないが、卒業式や文化祭後にカップルが誕生し、それが数ヶ月後には自然消滅するような場合もある。学校行事や生徒会活動等の特別活動には、このような「非日常の扉」を開く機能が備わっている。また、学校行事では、社会見学や職場体験、林間学校、大掃除、避難訓練などのように、日常世界と異なる「異界」に赴く機会も多い。こうした体験は、人間を変性意識状態に仕向け、そうでなければ実現しえない関係性構築や人格変容を引き起こす場合がある。

これについて考える際に参考になるのは、社会学の始祖の一人であるE・デュルケム(1915)によって集合的沸騰と名付けられた現象であろう。集合的沸騰とは、『新社会学辞典』の秀逸な要約によれば、以下のとおりである。

宗教的祭儀などの場で、人々が密集しあうことに伴って生じる激しい集团的興奮状態。デュルケムによると、そうした集团的熱狂、高揚の状態のなかで人は、俗なる日常的現実、俗なる自己を離れて、集団と一体化し、集団(社会)やその理想、なわち聖なるものの実在感やそれが有している道徳的権威を強烈な印象のもとに体験ないし再確認するとされる。デュルケムはオーストラリア・アボリジニのトーテム祭儀の分析を通して、こうした集合沸騰の社会統合、社会創造の機能を強調した。(対馬 1993)

たとえばスポーツイベントや音楽ライブの観客が感じる一体的高揚感、葬儀における集団感染的な号泣などが集合的沸騰の例である。祭儀を通じた非日常的な共通体験は、参加者たち個々人の意図とは別に、共同体の統合と再創造という潜在的機能を果たしているのである。

これに類する要素が特別活動にも観察できる。例えば、中学教師の堀裕嗣(2015)は「体育大会や球技大会、学校祭・文化祭におけるダンスやお笑い芸の発表などのとき、生徒たちはどの〈カースト〉に属する者も、「神聖なノリ」を侵さないという〈振る舞い〉に終始すると指摘する。

〈②残虐リーダー型生徒〉は応援団長よろしく場を一心に盛り上げる役を担うし、〈⑤お調子者タイプ生徒〉はもちろん、〈⑦自己チュータイプ生徒〉や〈③何を考えているかわからないタイプ生徒〉に至るまでが「面白く」「燃えることができ」「一体感を得られる」が故にこの祭りには何の疑問も抱くことなく参加することになる。(堀 2015:161)

堀のいう「神聖なノリ」は、直接的にはいじめ研究者である内藤朝雄(2012)の中間集団全体主義の議論を承けたものである。「ノリ」は仲間内のコミュニケーションの中で生まれる流動的な「群れの秩序」であり、市民社会の秩序と独立した社会空間を創出する。「ノリ」は特定の個人が決めるものというよりも、集団内の相互作用のなかに立ち現れる侵すことの許されない規律であって、これはデュルケムをはじめとする宗教社会学における神聖性の議論に容易に接続可能である。

神聖性は日常的規範の源泉でありつつ、時にはそれを超越する契機にもなりえる。学校に漂う「神聖なるノリ」もまた、日常的には学校の位階秩序であるスクールカーストと相互規定関係にありつつ、時にはそれを融解させる契機になりえるのである。

集合的沸騰による人格的変容は一時的なものに過ぎず、「祭り」が終われば参加者は「我に返る」かもしれない。しかしその場合も、集合的沸騰によって生まれた関係性やキャラを準拠にして新たな秩序が立ち現れる場合がやはりあるだろう。

たとえば、学校行事後にクラスの雰囲気好転したと感じられる場合がある。これはもちろん経験を通じて個々の成員が人格的に成長した部分もあるかもしれないが、のみならず集合的沸騰を経由して、ノリを生み出す社会的紐帯の質が利他的・互惠的なものへと変化したことによる部分もあるだろう¹⁰⁾。つまり、特別活動は、児童生徒間の社会的紐帯の総

体である生徒界の秩序を変動させる契機となるのである。

児童生徒集団が集合的沸騰にまで至らない場合にも、特別活動が固定化しがちな生徒界の社会秩序を変動させる要因として機能する可能性が存在する。たとえば、生徒会選挙においては、クラスのリーダー的生徒が立候補にあたって選挙活動のためにクラスメイトに対して象徴的負債を抱えることになるし、当落の帰結によってスクールカーストに変動が生じる可能性もある。もちろん、文化祭をはじめとする文化的行事においては、スクールカースト下位層に貶められた文化部の生徒が秘められた力を誇示する余地がある。

実際、学校行事やその準備を通した学級集団の再構築実践の例は、民間教育研究団体の思想的多様性に関わらず枚挙に暇がない（例えば、全生研常任委員会 [編] 1990、小川ほか 2008、佐々木基 [編著] 2012、『授業力&学級統率力』2013年12月号など）。それは特別活動が、重要な生徒指導の場であることを意味しているのであろう。

一般的に言って、社会的紐帯のネットワークである界の性質は、そこに参加する個人のモードであるハビトゥスと相互作用的に規定しあっている。しっかりとした互惠的な社会的紐帯が学級内に存在すれば、転校生もそれに適応するかたちで振る舞うことになるだろうし、そうした社会的紐帯が学校の隅々まで行きわたっていけば、上級生の卒業後もそうした校風は継承再生産されやすくなる。

このように、良質な生徒界は学校にとって貴重な財産である。そして集合的沸騰その他の心理的メカニズムを媒介にしながらそれを創出するのが特別活動の潜在的機能なのである。

3. おわりに

ここまで、特別活動の果たしうるポジティブな機能について論じてきた。だが、急ぎ付け加えるべきは、当然のことながら、特別活動が常に万人にとって好ましい効果を果たすものとなるわけではないという点である。

特別活動は人間心理の深部に触れるものであるがゆえに、危険を孕むものとなる。たとえば、社会

一般において「お祭り騒ぎ」は時に殺人のような道徳外的行為や集団浅慮による大事故、フーリガンのような暴徒化を帰結する。

学校においても、集合的沸騰を介した社会関係資本形成は時に「生贄の山羊^{スケープゴート}」を要求する。

内藤 (2001) がいみじくも指摘しているとおおり、いじめは加害者が被害者を祭具として使役して全能感を享受する「祝祭」の形をとって立ち現れる場合がある。たとえば体育祭などの場に流れる勝利至上主義的な空気が「運動音痴」な生徒を悪目立ちさせることで、いじめ加害者の迫害に正当性を付与する場合もありえるだろうし、いじめ共犯者たちが卒業後の同窓会等において武勇伝的に過去のいじめ加害体験を酒の肴に旧交を温めるといった場合も時もあるだろう。

また、前述の内藤 (2007) が彼自身の高校生時代の記録を用いて語っているように、いわゆる「管理教育」の盛んな学校においては、学校行事をはじめとする特別活動が管理教育を徹底するための有効手段として活用される場合がある。

内藤は、かつて彼が所属した高校である愛知県立東郷高等学校を例に挙げて以下のように語っている（ちなみに、東郷高校は1980年代当時において管理教育の推進校として全国的に有名であった学校である）。以下は彼が高校生時代に書いた告発文の一節である。

東郷高校では学校行事が息をつくひまもないくらいにたくさんあって、一年中、学校行事とその練習をやっているか、テストのために暗記をしているかで、ほかのことを考えるひまがない。最初は教師がむりやりやらせて、さぼったりしたらぶんなぐる。そうしているうちに、生徒たちは極端に熱狂してきて、教師とともに泣くこともある。

そのうえ、怠慢な生徒をほかの生徒たちが寄ってたかって圧迫することもある。たとえ露骨に圧迫しなくても、みんなが大声をはりあげているときに、自分だけ黙っていることは、いいようない恐怖と罪悪感を感じてしまうものだ。

(内藤 2007:89-90)

上記のように、当時の東郷高校では、学校行事に

よる集合的沸騰が管理教育の手段として使用されており、特別活動は時には「ノリ」に従えない者に対する集団的迫害を生起させる場合がある。

さらに、内藤によれば「東郷の元服式」と位置づけられた1年次の夏休みの林間学校では、俗世間から隔絶された空間で数日間にわたる軍隊式の生活訓練が行われていたという。期間中は、長距離の隊列行進をさせられ、活動中に水を飲むことを禁じられ、食事では蛾のさなぎや魚の骨を食べさせられ、私語や態度に至る厳格な規則に違反すると全員の前で屈辱的な指導を受けたり、あるいは同級生間で体罰指導が行われたりする。

とにかくみんな体力を消耗し、教師を恐れ、肉体的にも精神的にもヘトヘトに疲れ切っていた。それが最高潮に達した最終日の夜、キャンプファイヤーがあった。美しい星空の下、森の木々がまわりに茂り、かすかに川の音が聞こえる。広場の中央には巨大なファイヤーがごうごうと燃えていて刺激的だ。

教師たちは上半身裸になり、火を囲んで、足を開き、手をふりまわしながら「エッサッサー、エッサッサー！」と叫んで走りまわる。それにつづいて男子生徒が上半身裸になって、「ウォーッ、ウォーッ！」と叫びながら、走りだした。

それからものすごく大きな音で東郷音頭というのが流れてきて、みんなは輪になって狂ったように踊りつづけた。まるでロック・コンサートのような巨大な音だ。ぼくは頭がボーッとしてきた。みんなはヘラヘラ笑いながら放心したみたいに踊る。ほんとうに異様な顔つきをしていた。顔の筋肉がゆるみきっていて、笑っているのだが、まるで生気がない。ヘラヘラヘラヘラと笑っている。

ぼくもなんだかへんな気分になってきて、一瞬、「東郷が正しいんだ。いままでのぼくがまちがっていたんだ」という気が起こった。ぼくは恐ろしくなってきた。(内藤 2007:88)

ここに描かれている情景は紛れもなく集合的沸騰である。閉鎖環境において、寝食を共にしながら、高ストレスかつ極度に疲労した従属状況を人為的に用意し、そのうえで恩寵的に解放感を味わわせる

というこの方法は、カルト教団が人格の非自発的な再構成（洗脳）を行うための典型的な手口である。

このような例からしても、特別活動のもたらす自生的・組織的な秩序再構築作用や社会関係資本の形成作用を手放しで礼讃することはできない。特別活動は有効であるがゆえに危険でもあるのだ。

内藤が危惧するように、仮に学校が集団化による全体主義化を制御することができないのであれば、特別活動を廃止して生徒を個別に処遇する自動車学校方式の学校のほうが好ましいという主張にも妥当性がともなうことになるだろう。

とはいえ、それは特別活動自体の必然的問題性というよりも、それを扱う集団のエートスの問題であるようにも見える。いじめにしても、学校行事のようにして組織化された祭儀の挙行は、いじめのような自生的祝祭を増幅する場合もあれば抑制する場合もあるだろう。

集団的一体性を追求すればするほど、個人の多様性を蝕む「中間集団全体主義」の危険性は高まるだろうが、かといって個々人の学力向上に尖鋭化するなかでは、孤立化した個人同士による敵対的競争が活性化する恐れもある。その点において、多様性と互惠性に満ちた社会的紐帯を形成する「中間集団民主主義」という第三の道を実証的に探究することはやはり重要であるし可能であるように思われるのである¹¹⁾。

なお、それについて考えるにあたっては、吉見(1999)の次の指摘が重要であろう。

近代は、けっしてたんに「伝統的」な社会から受け継いできたもろもろの祭りや儀礼、祝祭的な場面を規律＝訓練的な権力によって抑圧し、排除していったのではない。むしろ近代は、一方ではそうした規律＝訓練的な権力を私たちの日常世界の隅々まで深く浸透させながらも、まさにそうした戦略をマツリの抑圧によってではなく、マツリの発明と再編、人々の日常性と非日常性についての新たなフォーメーションの創出を通じて達成していったのである。(略)

われわれはこの二重性、すなわち近代国民国家が創出していった文化のなかで作動する規律＝訓練的な権力と儀礼＝祝祭的な権力を決して二項対

立的なものとしてではなく、まさしくスチュアート・ホールがいうところのコンジャンクチュラな関係のなかにあるものとして歴史的にとらえなおしていかなければならない。(吉見 1999:8-9)

特別活動をひとつの支点にして発動する「儀礼＝祝祭的な権力」は、人間を抑圧する危険性のみならず、そうした抑圧に抵抗するための希望にもなりえるはずである。

近年は、集合的沸騰のような集団的精神高揚体験を大脳辺縁系共鳴 (limbic resonance) と呼ばれる現象によって脳科学的に説明しようとする研究も進みつつある。集合的沸騰のような社会心理的ダイナミズムの悪用をいかにして防ぎ、いかにして自覚的に善用していくかが今後問われるであろう。

註

- 1) 文部科学省「公立小・中学校における教育課程の編成・実施状況調査」より。平成 6 年度および平成 14 年度の実績値については http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gijiroku/03081101/006/001.pdf 平成 27 年度の計画値については http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afieldfile/2016/03/11/1368193_02_1_1.pdf を参照した。
- 2) ただし、個別の委員会で放課後等に行われる定期的な話し合いなどは除く。
- 3) ただし、運用実態においては、合唱祭を音楽、体育祭を体育、修学旅行の一部を社会に、というように、学校行事を教科に振り分けること等によって帳尻を合わせている場合もあるようである。
- 4) 平成 29 年度版中学校学習指導要領 147 頁、および同年度版学習指導要領解説 3 頁。
- 5) 調査において部活動の順位が高いことも同様の理由で説明できるだろう。部活動は日々の練習だけでなく、試合やコンクールなどの晴れ舞台を通して閃光記憶が形成されやすいのである。
- 6) 付言すれば、学校における児童生徒の主観的意義の充足は、教師による学校統治のための「パンとサーカス」としても使われるが、それだけでなく児童生徒の主体的な学校自治の必要条件をなすものでもある。
- 7) ブルデューにおいて、社会関係資本は「相互認知と相互承

認の持続的な諸関係(それがどの程度制度化されているかは場合によって異なるが)のネットワークを所有していることから生じる、現実的な、あるいは潜在的な資力の総体」(Bourdieu1980:訳書 55)と定義されている。より簡単に言えば「もしもの場合には役に立つ『援助』を与えてくれるかもしれない社会関係の資本」(Bourdieu1979:訳書 185)である。

- 8) これは「ブラック」な部活動、運動会の組み体操、あるいは生徒会選挙のような、児童生徒の心身に対して外傷を与える危険性を孕んだ場がなぜ学校で温存されがちであるのかについての説明の一つとしても数えられる。つまり、それらは児童生徒のあいだに強固な心理的紐帯を形成するための通過儀礼となるがゆえに、教育現場において愛好されるのである。
- 9) 三年生を送る会は、生徒会活動に位置づけられる場合が多いようである。
- 10) 集合沸騰は人格形成にも顕著な効果を有する場合がある。デュルケムは革命的・創造的時代に英雄が誕生する理由として時代の持つ集合沸騰の効果によると指摘する(Durkheim1915:訳書下巻 467)。カリスマが集合的沸騰を引き起こすのみならず、集合的沸騰がカリスマを生むのである。
- 11) その詳細については、山本(2012, 2016)を参照されたい。

文献

- 内田良(2017)『ブラック部活動—子どもと先生の苦しみに向き合う』東洋館出版。
- 小川悟・重水祐子・福井司・山口聡(2008)『中学校担任の12ヶ月』ひまわり社。
- 国立教育政策所[編](2014)「教員環境の国際比較—OECD国際教員指導環境調査(TALIS)2013年調査結果報告書」明石書店。
- 佐々木正昭・中村豊(2014)「特別活動とは何か—特別活動の基礎知識」佐々木正昭[編著]『入門特別活動—理論と実践で学ぶ学級・ホームルーム担任の仕事』学事出版。
- 佐々木基[編著](2012)『高校の学級担任になったら—やっつけはいけないNG指導&トラブル対応の事例集』明治図書。
- 清水睦美・堀健志・松田洋介[編著](2013)『「復興」と学校』岩波書店。
- 『授業力&学級統率力』2013年12月号(特集:教室内がコースト化—どうする戦略54)』明治図書。

- 全生研常任委員会 [編] (1990) 『新版 学級集団づくり入門 小学校編』 明治図書。
- 全生研常任委員会 [編] (2015) 『生活指導と学級集団づくり 中学校』 高文研
- 池田賢市・大森直樹 (2017) 「教育課程の時数の歴史—小学校 1886～2017 年」 中央大学池田賢市研究室・東京学芸大学大森直樹研究室。
- 対馬路人 (1993) 「集合沸騰」 森岡清美、塩原勉、本間康平 [編集代表] 『新社会学辞典』 有斐閣、683 頁)
- Durkheim Emile, 1915 *Les Formes élémentaires de la vie religieuse*. Presses Universitaires de France. 『宗教生活の基本形態—オーストラリアにおけるトーテム体系 (下)』 山崎亮 [訳] ちくま学芸文庫、2014 年)。
- 内藤朝雄 (2001) 『いじめの社会理論—その生態学的秩序の生成と解体』 柏書房。
- 内藤朝雄 (2007) 『いじめ』 学時代の』 柏書房。
- 内藤朝雄 (2012) 『いじめ加害者を厳罰にせよ』 ベスト新書。
- Bourdieu, Pierre. 1979 *La distinction: Critique sociale du judgement*, Minuit. 『ディスタクシオン—社会的判断力批判 I』 石井洋二郎訳、藤原書店、1990 年。]
- Bourdieu, Pierre. 1980 *Le capital social. Notes provisoires*, in: Actes RSS, Nr.31. 「社会資本とは何か—暫定的ノート」 『アクト 1 : 象徴権力とブラチック』 日本エディターズスクール出版部、1986 年。 / ただし邦訳は以下の文献に倣った。石井洋二郎 1993 『差異と欲望—ブルデュー「ディスタクシオン」を読む』 藤原書店。]
- ベネッセ教育開発センター [編] (2011) 「資料編基礎集計表 (校長調査)」 『第 5 回学習指導基本調査 (小学校・中学校版)』
- 堀裕嗣 (2015) 『スクールカーストの正体—キレゴト抜きのいじめ対応』 小学館新書。
- 本田由紀 (2005) 『若者と仕事—「学校経由の就職」を超えて』 東京大学出版会。
- 毎日新聞「社説: 小学校の夏休み短縮 授業増のしわ寄せは困る」 2017 年 8 月 24 日付、東京朝刊。
- 山田哲也、仲嶺政光、山本宏樹、久富善之 (2017) 「公営住宅居住者の子育てにおける諸資本とレジリエンス —B 市 A 団地の質問紙調査・インタビュー調査から」 日本教育社会学会第 69 回大会当日配付資料。
- 山本宏樹 (2012) 「向かい火」としてのパターンリズム—ピエール・ブルデューと民主主義」 現代位相研究所 [編] 宮台真司 [監修] 『統治・自律・民主主義—パターンリズムの政治社会学』 NTT 出版、171-212 頁。
- 山本宏樹 (2013) 「地域にとっての学校統合」 清水陸美・堀健志・松田洋介 [編著] 『「復興」と学校』 岩波書店、185-218 頁。
- 山本宏樹 (2016) 「政治闘争の進化論的転回—『保守/革新』の遺伝子文化共進化をめぐって」 現代位相研究所 [編] 宮台真司 [監修] 『〈悪〉という希望—「生そのもの」のための政治社会学』 教育評論、237-282 頁。
- 吉見俊哉 (1999) 「ネーションの儀礼としての運動会」 吉見俊哉・白幡洋三郎・平田宗史・木村吉次・入江克己・紙透雅子 『運動会と日本近代』 青弓社、7-53 頁。

